

阿波國 すきま 漫遊記

VOL.21 湿田

[取材・文・写真] 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開発・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 <http://www.sukima.com>

■阿南市伊島の湿田跡

県内で最大の湿田の跡。10ヘクタールほどもある広大な湿原で野鳥の楽園だ。



田んぼにも種類がある

コメを生産する農地である田んぼ。その田んぼには種類があるというのがご存知だろうか。小学校のころ習った地図記号の田んぼは2本の縦棒だった。しかし昭和の古い地図を見ると田んぼには3種類の記号が使われている。

乾田	〃	〃
水田	⏟	⏟
沼田	⏟	⏟

現代の地図で見ることができるのは乾田だけである。では水田や沼田とはどんな田んぼだったのだろうか。地図記号が3種類あったのは、戦前に帝国陸軍が地図を作っていた名残りだという。乾田とは冬ならば戦車などが進軍できる乾いた土地、水田は歩兵なら進軍できぬぬかるんだ土地、沼田はまったく進軍できない沼のような場所という区別だった。乾田の対義語「湿田」は水田や沼田の総称である。徳島では湿田を「フケタ」とも言う。

湿田はどこにある？

古い地図で湿田だった場所を訪ねてみても、どこも乾田や畑地が変わっていて昔ながらの湿田はなかなか見つからない。なにしろ、湿田は稲刈りのときにもぬかるんでいるため機械化がむずかしく労力がかかる。そこで他の場所から土を運んで埋め立てたり、排水工事をして水を抜いたりして長い努力の結果、ほとんどの田んぼは乾田に改良されたのだ。そして最後まで改良されなかった田んぼは耕作放棄されて、いまでは葦原などになっている場合が多い。



▲香川県豊島の湿田(参考)

香川県で偶然見かけた貴重な湿田。稲刈りのときもぬかるんだままで、手で稲刈りをしてきた。何かを引きずったようにみえるのは「田舟」を使った跡。この地域では湿田のことを「サブタ」と呼ぶそうだ。



湿田跡を訪ねて

▲豊島の湿田の土側溝(参考)

水路と田んぼの高さにほとんど差がなかったため田んぼから水が抜けにくくなる。これは田んぼで産卵する魚にとつて川と往来できる都合のよい構造でもあつた。田んぼの改良は、生態系を大きく変えてしまうことでもあつた。

県内の湿田跡で最も感動的なのは伊島の東部にある湿原だろつ。伊島は阿南の橋港から連絡船で30分の島だ。集落は島の西側にあり、峠を越えた東側はすべて廃村で田んぼは広大な湿原になつている。



▲伊島の湿田跡

ここはもしかしたら廃村という文脈で語つたほうがいいのかも知れない。見渡す限り人間の活動の気配がなく、物音も聞こえない。人類が滅びたら世界はこんな風景になるのではと夢想してしまつような場所だ。



▲鳴門市瀬戸町の沼田跡

間近に見てここが田んぼだったとは信じられない。近在の3軒の農家がここで稲を作つたといふ。腰まで泥にめりこむ深い田んぼで、海に近いため海水が逆流しないように水門の開け閉めが大変だったといふ。



▲阿南市福井町の湿田跡

奥に見える丘を切り崩して湿田を埋め立てて乾田にしたといふ。中央に見える池は、海水が水路に入らないようにする緩衝池で「潮池(しおいけ)」といふ。排水ポンプがない時代の工夫だ。

湿田での農作業

腰まで泥に沈んだ状態で動きまわることを想像してみよう。湿田での農作業がいかに過酷なものであつたろう。それどころか底なし沼のよう

場所もあり「あのひとが戻つてこんど思つたら、全身沈んでしまつて、頭に載せた傘だけ残つた」といふ怖い昔ばなしがあるほどだ。そうなるも農作業も命懸けである。そんな田んぼには「フタリギ」という丸太が沈めてあつて、その上を足でさぐりながら歩いたといふ。また稲刈りのときには「田舟(たぶね)」という小舟に刈り取つた稲束を載せて引いた。かつて湿田を持つていた農家に行くとも田舟が残つていた場合がある。何軒かでお願ひして見せてもらつた。湿田での農作業も今はもう速い昔ばなしになりつつある。



▲沼田で使つた四ツくまで(鍬)

柄が長いのは沼田の中で一箇所から動かずに広い範囲を耕すための工夫だ。また泥から抜けられなくなったときも杖のように使うこともあつた。それでも動けないときは稲にしがみついたといふ。



▲小型の田舟(阿南市福井町)

100x60x20(cm)の小型の田舟。現在も土を運んだりするのに猫車のように使うことがあるといふ。田舟は地元の大工が作るため、地域ごとに少しずつ構造や大きさが違つていて興味深い。



▲中型の田舟(徳島市八万町)

142x79x22(cm)の中型の田舟。八万町の阿波銀グラウンドの場所にあつた沼田で使われていた。第二室戸台風で園瀬川が決壊したときは、このあたり一面が水害にあつたが、田舟を使って孤立した人を救助したといふ。



▲大型の田舟(鳴門市瀬戸町)

190x90x22(cm)の大型の田舟。底面はFRP樹脂で補強されていて、とてもしつかりした造りだ。船大工が作ったのではないらうか。遊びで海に漕ぎ出したこともあるといふ。島田島には湿田の跡がたくさん残つている。